

「教育本質論」における授業時間外学習の促進

教育学・杉田浩崇

1. 授業の概要

「教育本質論」は教育学部学校教員養成課程の2回生を対象とした教職科目である。今年度の登録学生数は141名であった。

教育の基礎理論や歴史を学ぶことを通して、教育の本質や理念、学校教育の意味や役割等を理解することが目的である。科目の特性上、コメニウスやルソー、ペスタロッチーなどの教育思想を紹介することが多い。学生にとっては学校現場での教育実践と結びつけることが難しく、学習意欲の湧きにくい授業になりやすい。

そこで本授業では、教育思想を紹介する回とその思想を現代の教育的課題へ結びつける回とを平行に行うことで、教育思想をアクチュアルに学習できるよう工夫している。たとえばコメニウスの『世界図絵』は絵入り教科書として有名だが、その背景にある直観教授のポイントを教育内容の伝達メディアの側面から捉え、学校や教室のメディアの特異性の学習へと繋げている。また、ロックやルソーの教育モデルを粘土モデル／植物モデルとしてモデル化した後で、遺伝子操作時代における教育モデルについて討論する授業を行っている。こうすることで、教育思想の単なる暗記に留まることなく、教育思想と教育実践との往還関係を生み出すことを期待している。

2. 授業時間外学習の促進

2.1 授業時間外学習を促進する手立て

本授業では上記の工夫をより効果的なものにするために、教育思想を現代の教育的課題へと結びつける回の中で小レポートを課している。具体的には、①学校や教室をとりまくメディアの特性について（『世界図絵』のメディア性を考えた後の回）、②発達障害児に対する薬物使用の是非について（遺伝子操作時代の教育モデルの回）、③系統主義と経験主義をふまえた「学び」像について（ヘルバルトとデュイイの教育思想を紹介した回）、レポートを提出してもらった。②③については読物課題を課し、授業で学んだことと結びつけな

れば論じることのできない課題とした。また、レポート提出はMoodle上で行い、フォーラムを立てて、他の受講生のレポートを読むことができるようにした。これにより、受講生同士で意見交換をする場合もあった。

こうしたMoodle上でのレポート課題のほかに、各回のまとめと次回のパワーポイント資料をMoodle上に掲載し、授業の復習と予習を行う機会を設けた。また、小レポートのほかに4回の任意課題をMoodle上で設定し、授業時間外での議論の場を設けた。議論が活発になるために、任意課題で意見記入をした場合には加点することを学生に伝えた。

2.2 授業時間外学習実態の調査・分析

上記の手立てがいかに授業時間外学習の促進に繋がったのか。以下の調査を行った。

①「授業内容とDPの対応に関する調査」

教育コーディネーターが主体となって每学期末に実施する「授業内容とDPの対応に関する調査」を活用し、学生アンケートに基づいて授業時間外学習の量的調査を行った。

課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間の一週間平均時数については、平均が0.72時間であった。0.5時間と回答する学生が最も多く30数名おり、0時間と回答する学生も10数名いた。この結果をみると、それほど多くの授業時間外学習がなされてはいないと言えよう。3回の小レポートの作成にはそれなりの時間がかかったはずであり、だとするならば、それ以外の授業回において予・復習に費やす時間が少なかったということになる。Moodle上に授業のまとめと次回のパワーポイント資料を掲載し、授業前にパワーポイント資料と教科書に目を通すことを期待したが、効果が乏しかった。小レポートだけでなく、授業毎に小テストを課すなど、何らかの工夫が必要なのかもしれない。

また、自発的に授業外学習を行ったり、読書に取り組んだりした学生も少なかった。数名、かなりの時間の自発的学習と読書を行っている学生もいた。授業回ごとに参考文献を

Moodle 上に掲載したため、意欲の高い学生にとっては効果的であったのだろう。

とはいえ、「教育本質論」は受講生も多く、発表形式の課題を与えたり、グループでプロジェクト型の課題に取り組んだりすることが難しい。学習意欲にも個人差があり、必修科目であるため、逆転授業のように授業外時間での学習を前提にした授業進行も現実的とはいえない。今後は、Moodle を活用した手立てを継続しつつ、大人数授業において効果的に授業外学習を促進するためにはどのような手立てが可能なのか、多角的に探っていきたい。

②任意課題における記述

先述したように、本授業では Moodle 上で任意課題を設けている。この課題に取り組むためには、学生は授業外時間を活用して自主的に考えなければならない。任意課題で提出された意見を質的に分析することで授業時間外に学生がどのような学びをしたのか、その一端を明らかにすることができるだろう。

まず、「教育は野生児を幸せにしたか」と題したフォーラムを取り上げよう。受講生は、授業内で教育の必要性を示す事例として紹介された野生児について批判的に考察した論文を読み、意見を述べなければならない。主な論点は、野生児を人間に向けて教育することが果たして妥当なのか否かであり、これによって教育目的とは何かを改めて考えさせることがねらいであった。

このフォーラムには延べ 23 件の意見が提出され、「人間として育てられることで野生児は他者と交流することができるようになった」と肯定的に捉える立場と、「野生児自身はそうされることを望んでおらず、自然の中で野生児らしく育てられるべきだった」と否定的に捉える立場が見受けられた。また、教育を個人の幸せで考えるだけでなく、社会全体の視点から捉える意見も出るなど、多角的な意見が寄せられた。このフォーラムではある学生の意見に対して、別の学生からコメントがなされるものもあった。たとえば、ある学生が「人間社会に生きる以上は、カマラ[野生児]たちだけの幸せより、社会全体の幸せを優先されるべきであると思う」と述べたのに対して、「子どもの幸せではなく社会全体の幸せのための教育という意見を面白いと感じました」というコメントが寄せられ、社会の在り方自

体についても考える必要があるとの意見が表明された。授業外学習によって授業内で扱った内容を批判的に考察する中で、論点が示され、さらなる考察の可能性が示された事例だと言えよう。

次に、「ロックの体罰論」と題したフォーラムを取り上げよう。受講生は、ジョン・ロックが体罰禁止を論じながらも、例外的に体罰を肯定している箇所について自分なりの意見を述べなければならない。授業内ではロックの『教育に関する考察』の一節を読んでもらってグループワークをしたが、それほど深めずに終えた。論点は、教育愛という善意があれば体罰は許されるか否かであり、教育しようという善意に孕まれた暴力性を考えてもらうことがねらいであった。

このフォーラムには延べ 30 件の意見が提出され、体罰をめぐる多様な意見が交わされた。ここでもある学生の意見に別の学生から意見が寄せられた。たとえば、「相手の痛み、苦しみをすることで自分がやっていたことを反省することで、生徒自身の成長につながるのではないか」として体罰を例外的に認める学生の意見に対して、言葉かけの具体的な提案や体罰以外の方法（清掃活動を課すなど）で罪の意識を芽生えさせる工夫、不登校など二次的な影響への懸念、歯止めがきかなることへの懸念などの意見が提示された。体罰問題が多様な観点で捉えられたと言えよう。

その後のフォーラムでも「子どもの貧困に関するビデオの感想」について延べ 30 件、「様々な教師像に関するビデオの感想」について延べ 34 件の意見が提出された。141 名の登録学生のうち、30 名前後は授業外時間に自分なりに考え、意見を表明していたと言える。

3. 総括

授業時間外学習を促進するために、小レポートを課したり、Moodle 上での任意課題を設けたりした。学習時間数としては週平均 0.72 時間であり、十分な学習時間とはいえない。自主的な学習が少ないのも課題である。それでも任意課題の記述を見ると、自分なりの考えを表明したり、他者の意見によって見方の変容・深まりがあったりすることがわかる。大人数授業では授業時間中に学生相互の学び合いの時間を確保しにくい。Moodle を活用したさらなる手立てを考えていきたい。